



ワシントンD.C.にて、絆プロジェクトメンバー記念撮

絆プロジェクト

「絆プロジェクト」は、本校の生徒が、東日本大震災で被災した学校にティンパニーを送ったことから始まりました。本校は茨城県つくば市にありますが、私学であり、学寮もあるため、県内外からの生徒を受け入れています。本校は内陸部にありますが、地震の際には震度5弱を経験し、一部地域では断水したり、常磐線がなかなか復旧しなかったりと、登校ができない状態が4月まで続きました。そのような環境の中で、もっと辛く大変な思いをしている方々が東北には大勢いる、自分たちに何かできることはないかと考えました。音楽科の教員から音楽室に使用されていないティンパニーがあることを聞き、修理して被災地の学校で使っていただこうと、生徒会が立ち上がりました。校内での募金活動で集めた資金をもとに石巻市立住吉中学校へティンパニーを送ることにしました。そのことがきっかけとなり、住吉中学校の生徒と交流することになりました。

交流に際し、きちんと東日本大震災について学びたいと中学生・高校生の有志50名ほどが集い、「石巻絆プロジェクト」が発足しました。有志生徒は、2013年3月と12月に、石巻を二度訪問して、研修を行いました。視察だけの研修ではなく、石巻日々新聞社を訪問し、お話を伺いジャー

ナリズムについて学んだり、からころステーションを訪問し心のケアについて学んだり、さらにはPEACE BOATの方々から国際協力についてお話を伺ったりしてきました。石巻絆プロジェクトに参加して学んだことを広く伝えようと、訪問から帰って来たあとも文化祭で発表するなどの活動を続けています。

平成25年2月15日から17日には、日本政府により進められている「キズナ強化プロジェクト」を通じて、ブルネイ・ダルサラーム国の高校生グループが本校を訪問しました。ブルネイの生徒たちは、短い間でしたが、本校生徒の家庭にホームステイをし、体育や調理実習に参加したり、初めて日本の学校生活を体験したりしました。石巻絆プロジェクトの有志メンバーがプレゼンテーションを行い、被災地が力強く復興に向かっていくことを伝えました。また、ブルネイの生徒も自国についてのプレゼンテーションを行いました。

そして3月には、「キズナ強化プロジェクト」の短期派遣事業として、アメリカのワシントンD.C.およびシアトルへ、石巻絆プロジェクトに参加した高校生25名が派遣されました。ここで生徒たちホームステイを体験し、トマス・ジェファーソン高校を訪問しました。石巻で学んだこと、感じたこと、考えたことを英語で発表し、

JUNCTION

～文化と文化の交差点～

茗溪学園 国際教育部通信

平成24年度の記録

2013年7月発行

<https://www.meikei.ac.jp/>

石巻の方々の「震災を忘れないで欲しい」という思いを世界へ発信する機会を得ました。このような経験を経て、生徒は学んだことを伝えるだけでなく、石巻の方々のために「アクション」を起こしたいと考えようになりました。そこで本校生徒のアクションの第一歩として、被災地の同世代の生徒の皆さんに文房具を送ることにしました。石巻絆プロジェクトのメンバーが中心になって文房具を集め、宮城県石巻市立牡鹿中学校のみなさんにあてて郵送しました。今後も、「震災を忘れないでほしい」という被災地の方々の思いを受け止め、国内、国外へ広く発信できるような活動をしていきたいと思

います。



ワシントンD.C.にて



プレゼンテーションの準備風景

SOSEP

平成24年2月6日から19日まで英国 Christ College より、ジェイミー・モリス君、デイヴィッド・シルク君、カーラ・マクノートンさん、エリノア・ジョーンズさん4名が SOSEP 留学生として本校での生活を体験しました。昨年末同校に留学した高校1年の田山君、藤井君、伊藤さん、王さんがバディとして、ホストシスターとして奈須真莉乃さんが、日本での生活をサポートしました。留学生は英語や体育、家庭科、日本語などの授業に参加し、放課後には様々な部活動を見学して、日本の高校生活を満喫



Nelson Collegeにて

していました。何事にも積極的に取り組んでくれ、茗溪生と素晴らしい交流が出来たと思います。本プログラムの実施にあたりご協力頂きましたホストファミリーの皆様はじめ関係の皆様、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

また、3月16日から30日まで、SOSEP ニュージーランド短期留学が行われました。参加した高校1年生8人は、2名ずつ4校の学校に派遣されました。北島のオークランドにある Edgewater College では、砲丸投げやアメフトなど様々なスポーツに挑戦しました。同じくオークランドの Macleans College では、日本語の授業にも参加しました。ニュージーランドの生徒が日本語を学習している様子を見て、漢字、ひらがな、カタカナという3種類の文字で表記する日本語の難しさをあらためて感じたようです。南島のネルソンにある Nelson College では、ホストの生徒と Abel Tasman 国立公園で野生のオットセイを見たり、海岸まで4時間かけて歩いたり、ニュージーランドの大自然を満喫しました。同じくネルソンの Waimea College では、英語を母語としない現地の生徒と一



Edgewater Collegeにて

緒に英語や道徳を学ぶ授業に参加したり、ファームで動物と触れ合ったりして楽しみました。どの生徒にとっても英語を使って現地の学校生活やホームステイを行ったことは、貴重な体験になったようです。「伝えようとする気持ちがあれば伝わる」ということを実感し、さらに英語学習や異文化理解に意欲が高まりました。今年の7月には、ニュージーランドの各校から生徒が茗溪学園を訪れます。今後も茗溪学園と各校との交流がますます発展し、長く続いていくことを期待します。

オーストラリア研修旅行

平成24年10月10日から18日の日程で、高校2年生のオーストラリア研修旅行が実施されました。今回は3クラスずつ行きと帰りの日にちをずらしてシドニーに1泊し、世界遺産のオペラハウスやセントメアリーズ大聖堂をバスで巡るクラス別見学も行いました。ファームステイでは、日本では想像も出来ないほど広大な敷地に羊1000頭やカンガルー300頭など多くの動物を飼育している家庭もあり、オーストラリアの大自然を満喫することが出来ました。2泊3日の生活の中で英語での交流も劇的に進歩し、戻ってきたときにはごく自然にコミュニケーションを楽しんでいる姿が多く見られました。短い期間でしたが、涙あり、笑いありのファミリーとのお別れは、とても感動的なものでした。テーマ研修にあたっては、見学だけで終わることなく、少なくとも1つはガイドによるツアーを含むことという条件を設けました。建築、生物、医学、教育など10程度のテーマを設定し、30か所ほどの施設を訪問しました。それぞれの班には現地の大学生に Tour Assistant として付いていただき、楽しく交流しながら1日の活動を行うことが出来ました。

学校交流では、Billanook College, St. Joseph's College, Mount St. Joseph Girls' College の3校を訪問し、授業に参加して日本との違いを実感したほか、オーグフットボールやマウンテンバイク、アボリジニアートなど数多くの種目を通じて、オーストラリアの高校生と交流を図ることが出来ました。通常の授業を変更してプログラムを用意して下さった各学校の先生方や生徒の皆さんに、心より感謝申し上げます。

わずか1週間の研修でしたが、現地の方々の温かいサポートのお蔭で様々な貴重な体験をし、大きく成長して帰ってきました。多くの生徒が英語によるコミュニケーションに対する自信を深め、日本という国を外から見たことでその良さを再認識し、また将来国際的に活躍する自分の姿をイメージすることが出来たと思います。この経験が将来に活かされることを期待しています。



Billanook Collegeにて、記念撮影

デスバレー研修

平成 25 年 1 月 6 日～12 日の 6 泊 7 日間に、高校 1 年生 8 名、高校 2 年生 1 名、計 9 名の希望者がアメリカのデスバレーツアーに参加しました。雄大で複雑な地層形成や過酷な乾燥環境に適応する生物種という興味深い題材をもとに、英文資料による事前研修と英語による現地調査研修活動、大学での受講、事後英文報告書作成を通じ、科学を英語で思考しディスカッションするという体験は、英語を科学に応用する力、科学において英語を活用する力を有効に蓄えることを実証する機会のひとつとなりました。事前研修で特に興味を持った内容について個人テーマを設定し、現地研修においてより深く研究活動が行えました。また、事後報告として、平成 25 年 1 月 28 日、校内高校部集会において、高校 1 年生および高校 2 年生を対象にパワーポイントを用いて 40 分の成果発表をしたり、平成 25 年 2 月 1 日には「SS 研究発表・個人課題研究発表会」（会場：筑波大学）の全体会において、パワーポイントを用いて 15 分間の英語での成果発表もしたり、あわせて、ポスター発表も行いました。

生徒の感想

「デスバレーの景色は日本のそれとは比べ物にならないほどスケールが大きくて、とても新鮮だった。デスバレーは植物が無く、岩肌が露出していて、地学の研究観察対象としては申し分のない場所だと感じた。」

「デスバレーの自然の雄大さとその計り知れない力強さに深く感動した。そして、私がどれほど小さい存在であるかを感じることができた。私が見た美しい景色を守り、後世に伝えていくことが何よりも大事なことだと思った。そして、そのために環境にいい生き方をしていきたいと思った。」

「訪問する直前までは、内容についていけるのか、とても不安になり緊張していたが、講義を受けている時や研究室を訪問している時に、事前に学んだことがどんどん結びついていき、とても楽しかった。以前は英語を使って科学系の仕事をすることなどがどういことか、イメージを持てなかったが、今回それを現地で感じることができ、とても良い経験になったと思う。」

実施日	事前研修の内容
12/08	Neuroscience の基礎について
12/11	デスバレーの地質・植物について
12/15	デスバレーの動物・歴史について ニワトリの脳の観察

	テーマ	分野
1	デスバレーの地形と地層の観察 ～地形・地層形成のプロセスを考察する～	地質学
2	デスバレーの水の流れ	地質学
3	過酷な環境に生息する植物について ～彼らはどのようにして生き残ったのか～	生物学
4	土壌の環境と植物の構造	生物学
5	デスバレーに生息する生物～Pupfish～	生物学
6	食物連鎖（Food Chain）～デスバレーを通して～	生物学
7	保護区における動植物の保護 ～生態系を守るためには～	環境科学
8	乾燥気候地域における人間の生存	環境科学
9	デスバレーにおける問題点について	環境科学
10	脳科学 ～UC サンフランシスコにて～	生物学



Golden Canyon にて



Mehaffey 先生の実験に参加して

クロスカルチュラルトーク

例年通り JICA より研修員の方々をゲストとしてお招きし、異文化交流をしました。今年度は留学生にもゲスト役を協力してもらいました。初めこそ緊張で強張っていた表情も、座談会が進むうちに笑顔が見られ、和やかな雰囲気となりました。事後の生徒の感想の中で多かったものをご紹介します。「ゲストと楽しい時間を過ごせた」「自分の英語が通じて嬉しかった」「外国に興味を持った」「英語の必要性を大いに感じた」

「（英語の上手い下手よりも）積極的に話そうとする姿勢、伝えようとするその気持ちが大事だとわかった」英語を勉強していて良かったと思うのは、自分の伝えたいことが相手に伝わったときでしょう。座談会でその楽しさを実感した生徒が多かったためか、午後の自由参加のティーパーティーには百五十名を超える生徒が参加しました。外国やその国の人々の



英語で日本について説明する若狭生

ことを正しく把握するためには、直接自分の目で見ること、直接人に会って話を聞くことが大切で、この行事はその絶好の機会となりました。異文化交流とは、互いに自分の国の文化を「英語」という共通言語ツールを用いて伝え合い、理解を深めることです。この行事が今後の英語学習に意義を感じ、世界に目を向けるきっかけとなることを期待します。

留学についての報告

平成24年度に留学をしていた生徒の報告を致します。AFS 留学生としてオーストラリアで留学期間を送っていた中根絵里さん（現6年B組）が平成24年1月より茗溪学園での生活を始めています。同じく、現6年F組の宮崎星さんがAFS 留学生としてイタリアでの留学期間を終え、平成24年8月に茗溪学園に帰ってきました。また、旧5年F組に所属していた田代周平くんが、厳しい選考を突破し見事UWC 香港校に合格し、平成25年1月より留学期間を送っています。

平成25年度はAFS 交換留学生として、マレーシアからEe Sien Thienくんをお迎えしました。5年A組に所属し級友と共に学校生活を送っています。また、現在交換留学制度を使用し留学している生徒は以下の4名です。

5年A組 横尾紫苑さん
EIL 留学生としてフランスへ留学中

5年D組 永山瑞生さん
AFS 留学生としてアメリカへ留学中

5年F組 清水貴瑛さん
AFS 留学生としてオーストラリアへ留学中

4年B組 寺島七星さん
YFU 留学生としてアメリカへ留学中

関先生マラウイへ 子どもたちの遠い国への興味実感

平成24年7月29日から8月10日までJICA 筑波の教師海外研修事業により、本校の社会科（地理）の関寿子先生を含む茨城県内の教員5名がアフリカ南東部のマラウイ共和国へ派遣されました。同国では1994年に初等教育が無償化されて以来、初等・中等教育の就学者数が激増し、教育施設が不足しています。そこで日本のODAの無償資金協力事業によって学校の建設・整備がなされており、派遣された教員らは事業により整備された学校を視察し、日本の地理や文化を紹介する授業を行いました。「生徒は初めて見る海の写真に感激し、高層ビルが立ち並ぶ東京の様子や日本の人口の多さに驚いていて、中には『いつか日本へ行きたい』と語ってくれた子もいました。」世界最貧国に数えられるマラウイには問題が山積しています。しかし、人々の強く逞しく生きる姿や常に笑顔で迎えてくれる寛大さなど多くを学ばれたそうです。更に、帰国後は現地での視察や学びをもとに異文化理解や国際協力について考える授業が中学2年生を対象に行われました。「遠く離れた国を知りたいと思う生徒の気持ちは日本でも同じでした。この授業を機に生徒が世界へ目を向け、将来世界中の人々と平和な世の中を構築してもらえればと願うばかりです。」



マラウイの子どもたちと

実現！ 念願のNZ 遠征

平成24年7月、高校ラグビー部33名は、部創立以来念願だったニュージーランド遠征を実現しました。ニュージーランド・オークランド空港では、21回生ラグビー部OBでコーチングを学ぶために留学中の白馬悠さん、25回生OGで語学留学中の小張美智子さんの出迎えを受け、2人はその後も心強い現地スタッフとして同行していただきました。また、SOSEPなどで交流のあったマクリーズ・カレッジには、試合のアレンジやホームステイ等、さまざまな面でお世話をしていただきました。1週間という短い日程ではありましたが、選手たちはマクリーズ・カレッジを含む3校との試合の他、本場のコーチから直接指導していただくという貴重な経験も得る中で、大きな自信と力をつけました。試合では、体の大きな選手、タックルの強い選手たちを相手にしても、茗溪らしい展開ラグビーが通用することを実感したようです。またラグビー文化にも強く影響を与えているマオリ族の文化や伝統にも触れ、そして何よりも現地の高校生やその家族の方々との交流によって多くのことを学んで帰国しました。



Macleans College との試合

国際ソロプチミスト日本東リジョン賞 第8回ユースフォーラム予選会

1995年より本校では、国際ソロプチミストつくばクラブのプログラムに参加しています。一つ目は、バイオレット・リチャードソン賞です。この賞は14歳から17歳の女性で、地域や学校で大変優れたボランティア活動に対して贈られます。もう一つは、ユースフォーラムです。フォーラムに参加するためには、与えられたテーマについての小論文とスピーチの審査で合格することが条件です。今年のテーマは「消耗される地球—持続可能な国際社会をどう築くか」で、高1・2年の11名の生徒（英文5名・和文6名）から応募がありました。予選会は5月18日につくば市内のホテルで開かれ、生徒は5分以内のスピーチをしました。その結果、最優秀賞に5年B組佐久間夏美さん、優秀賞に5年D組仁保智介くん、努力賞に5年E組伊野つづみさんが選ばれ、8月25日に国連大学で開かれるフォーラムには佐久間さん、仁保くんとAFS生のシエン・テイエンくんが参加することになりました。なお、この会の初めにバイオレット・リチャードソン賞の日本東リジョン賞が6年F組高橋彩夏さんに授与されました。

